

都道府県番号	36
都道府県名	徳島県

【 ①□ ②■ ③□ 】

I 学校名及び規模

学校名	徳島市論田小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	1	13	21
児童数	57	78	70	77	78	77	2	439	

II 研究の概要

(1) 研究主題

<p>「わかる授業」で確かな学力の向上をめざして ---児童一人一人の学力向上をめざす学習プランの確立---</p>

(2) 研究主題設定の趣旨

<p>激しく変動する21世紀の社会にあつて、これからの学校教育に求められているのは、子どもたちに基礎・基本の確実な定着を図り、それをもとに、自ら学び、考える力などの「確かな学力」を育むことである。そのためには、これまで多く用いられてきた一斉画一的な指導（形式的な平等の教育）を今一度見つめ直し、子ども一人一人の実態に応じた指導（実質的な平等の教育）へと転換を図ることが大切になってくる。子ども一人一人の個性を大切に、子どもたちが持っている創造の芽を摘むことなく、子どもたちの持つ様々な能力を引き出し、確かな学力を付け、心豊かに大きく育てていくのである。</p> <p>ところで、子どもたちは、日々の授業が自分にとって興味深くわかりやすいもので、課題を解決することができれば、学ぶ意欲も高まり学力もついてくると考えられる。しかし、現実には、たとえ教師が子どもを同じように教え、それぞれに等しく学習の機会を与えたとしても、習得した結果には違いが生じてくる。というのも、同じような学習環境を準備しても、学習適性、興味関心、生活経験などは子どもにより異なり、学習への取り組みは子どもによって違ってくるからである。その結果、身に付ける学力なども個人ごとに違ってくるのである。</p> <p>そこで、教師は、このような学習の成立を考え、一人一人の子どもの実態を正しく把握し、望ましい学習環境を提供し、子どもと環境とのかかわり方をよく見取り、子どもが望ましい結果を身につけるように支援しなければならない。</p> <p>しかし、これを実際に行うとなると大変なことである。ましてや、一人の教師が多くの子どもたちに対応するのであるから、そこには自ずと限界が考えられる。特に1学級あたりの児童数が多くなるとなおさらである。</p> <p>そこで、複数の教師が協力してTT指導や少人数指導を行い、一人の教師で行っていたときよりも子どもに寄り添って、わかりやすく、習熟の程度などに応じた授業を行い、確かな学力の向上をめざすことはできないかと考え、本主題を設定した。</p>
--

III 研究の概要（選択した観点を中心に記述すること）

(1) 研究推進体制の工夫

ロンドンフロンティア委員会（各委員会の名称及び運営組織）

○メイン委員会・・・会長が召集し、委員長の司会進行で全教職員で協議を行う。

○企画委員会・・・委員長が召集し、委員長及び各部会の部長で開催する。

内容は、各部会からの提案及び研究報告とする。

○小委員会（各部会）各部長が召集し、各部のメンバーで開催する。

内容は、現状把握・提案等とする。

☆各部会の研究内容

○授業・研究調査部・・・（授業研究、基礎定着研究、教材研究、評価研究、研究会）

①少人数指導・TT指導・教科担任指導の授業研究

②朝の学習（フロンティア）の研究、学力テストの分析と追跡調査

③課題選択学習、習熟度別学習に向けての教材研究

- ④学力を評価するための問題作り
- ⑤授業研究会での提案・企画運営
- 生活・情報整理部・・・(情報①, 情報②, 生活調査)
 - ①フロンティアHPの作成, フロンティアだよりの発行
 - ②インターネット等での情報収集, 資料の整理
 - ③児童の学校生活アンケート等での調査研究及び結果の考察
 - ④学校生活見直しプラン作り

(2) 研究の実際

4年 習熟度別コースでの取り組みを通して

1. はじめに (一部略)

本学年の児童は、昨年度から、2学級を3つのグループに均等に分けて少人数指導を行っていた。その子どもたちのほとんどは、少人数指導がよいと受け止めている。その主な理由に「質問がしやすい」「発表の時にあたる回数が多い」「人数が少ないので分かりやすい」等があげられている。しかし、単元によっては、少人数であっても一人一人の学力差が大きく、理解に時間がかかる子と速い子で差ができ、個別の指導が十分行き届かないことが出てきた。

そこで、本年度は1クラスを2つのコースに分けて習熟度別に指導することにし、じっくり復習もしながら学習をするハイキングコースと難しい課題にもどんどん挑戦するアスレチックコースのいずれかを選択してコースを決め、学習を展開することにした。

2. 研究の仮説

- 習熟度別学習を取り入れることにより、遅れがちな子どもたちへもよりきめ細やかな指導ができ、理解力と意欲を高めることができるだろう。
- 習熟度別学習にすれば、早く課題を終えた子どももさらに学習を深めることができ、学習に意欲を持って取り組めるだろう。

3. 研究の手だて

- 単元導入前あるいは基本的な内容を学習した後に、レディネステストを実施する。
- レディネステストの採点結果に基づいて、子どもと保護者が相談の上、コースを決定する。
- ハイキングコースは、必要に応じて補充的な学習を展開する。
- アスレチックコースは、必要に応じて発展的な学習を展開する。

4. 実践事例

- 単元名 わり算 (2)
- ※指導にあたって、単元の目標略
- 単元の指導計画・評価計画 (全13時間)
(小単元⑥のみ、あとは略) ※評価規準は指導のポイントとして位置づける。

小単元	時	学 習 計 画	指 導 の ポ イ ン ト
⑥ おさら い	1 本 時	<ul style="list-style-type: none"> ・(3位数)÷(2位数)のわり算の文章題や筆算の問題を解決する。 ・余りの処理の仕方を考える。 	<p>考 (3位数)÷(2位数)の文章題で演算決定ができ、余りの処理も考えることができる。</p> <p>知 (3位数)÷(2位数)のわり算の筆算ができる。</p>
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・わり算の性質を利用して工夫した計算や電卓を使った計算を解く。 ・(4位数)÷(2位数)の筆算を解く。 	<p>表 わり算の性質を利用して工夫した計算や電卓を使った計算を解くことができる。</p>

5. ○本時の学習 (ハイキングコース) ※判断基準略

- (1) 目 標 2位数でわるわり算で余りが出る場合、余りの処理を考えて解決することができる。

(2) 展 開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 ○・・・努力を要する子どもへの手だて
<p>1 わる数やわられる数をかえて考えることで、わり算山の問題を解決していくという本時のめあてをつかむ。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">さつまいも157こを1回に15こずつやきいもの広場まで運びます。全部運ぶには、何回運べばよいでしょう。</p> <p>2 各自でいろいろに考えて自力解決をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図で <p>・式で $157 \div 15 = 10 \dots 7$</p> <p>3 各自の考えを発表し、友達の考えと比べながら余りの処理の仕方について確かめる。</p>	<p>1 わられる数やわる数を増やしていき、(3位数)÷(2位数)の筆算で考えればよいことを確認する。</p> <p>2 図をかいたり式に表したりして、自分なりに考えをまとめられるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○机間指導をし、解決の手がかりがつかめていない子どもにはヒントカードや助言を与える。 ○2位数でわるわり算の筆算にとまどっている子どものために、わり算の筆算の仕方のアルゴリズムをはっておく。 <p>3 余ったさつまいもも運ぶためには、商に1をたせばよいことに気づくようにする。</p> <p>○わり算の筆算の仕方についても、確かめる</p>
<p>$157 \div 15 = 10 \dots 7$ $10 + 1 = 11$</p> <p>4 自分でコースを選び、わり算山の適用題を解き、本時のまとめとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頂上についての感想を書き、次時への意欲を持つ。 	<p>ことができるようにする。</p> <p>4 本時学習を生かして適用題を解き、次の国へ進んでいくことができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く解いた子どもには、多くの国を回って頂上まで進むように促す。

○本時の学習 (アスレチックコース) ※評価基準略

(1) 目 標 (3位数)÷(2位数)の適用題で、余りが出た場合の余りの処理が正しくできるようにする。

(2) 展 開

学 習 活 動	教 師 の 支 援
<p>1 わり算島巡りの問題を見て、そのルールについて話し合い、本時のめあてをつかむ。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">わり算のあまりに気をつけて問題を考えよう</p> <p>2 各自、いろいろに考えて自力解決する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・余りを切り上げる場合と切り下げる場合の問題を考える。 <p>3 各自の答えを発表して話し合い、立式や答えの確かめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや、余りの処理の仕方が正しくできているか振り返る。 <p>4 本時学習を生かして、適用題を解く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・答えの理由が説明できるようにする。 ・本時の感想を書き、次時の目標を持つ。 	<p>1 (3位数)÷(2位数)で割り切れる場合の確かめをして、本時の問題を概観させ、意欲を持って学習できるようにする。</p> <p>2 余った荷物を運び出すためには、商をどのように処理すればよいか既習事項に振り返って考えるように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進んだ児童には、自分の考えが説明できるように促す <p>3 自分の考えと比べながら、友だちの考えを聞くように促し、余りの処理について理解できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・根拠を明確にして発表できるように促す。 <p>4 余りの処理に気を付けながら解決できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のよくできたところや苦手なところに気づき、次への目標とするよう促す。

(3) 研究の成果と課題

○成果

- ①「これまでの授業と比べてどうだったか」というアンケートで、習熟度別にコース分けして学習する方がわかりやすかったという児童が圧倒的に多かった。
- ②「習熟度別額私有についてどう思うか」という問いでは、「自分の力にあったコースを選ぶのでよくわかる」「先生が丁寧に教えてくれるのでよい」等肯定的な意見が多かった。
- ③「コースを選択する話を家庭でしたところ、話が盛り上がってよかった。」という子どもがいた。

○今後の課題

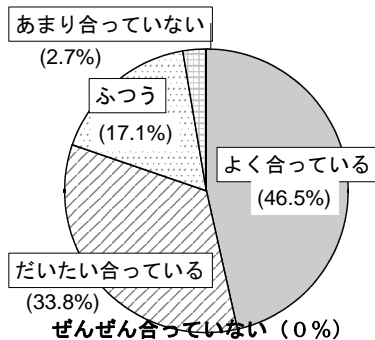
- ①教師から見て、コースの選択を誤っているのではないかとこの子どもがいる場合、その子の理解度に応じて支援の仕方を工夫するなど、配慮がいる。
- ②よりきめ細やかな指導を通して、一人一人に応じた個別指導を工夫する必要がある。
- ③ハイキングコースの場合、問題の量を減らして、一人一人に満足感を味わわせることが大切であるが、子どもによっては問題数を多くする必要がある。
- ④子どもが意欲的に取り組むためには、教科書からの問題ばかりでなく、クイズやゲーム等を取り入れた教材の工夫が必要である。
- ⑤ヒントカードはどのように使えば効果的であるか、その内容と使い方を工夫する必要がある。
- ⑥自己評価カードを用いることによって、児童自身が自分を客観的に観ることができるようになる。

☆算数科コース別学習に関するアンケート（参考資料）

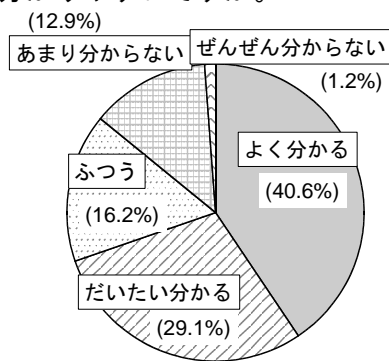
別表は、2003年10月に3～6年生の児童とその保護者を対象に実施した算数科コース別学習に関する意識調査の結果である。

○児童の意識調査結果

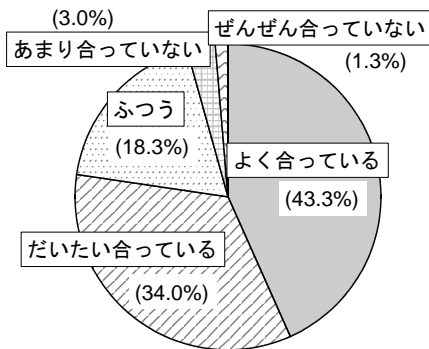
1. コース別の学習方法は、あなたに合っていますか。



2. コース別学習にすると、授業が分かりやすいですか。

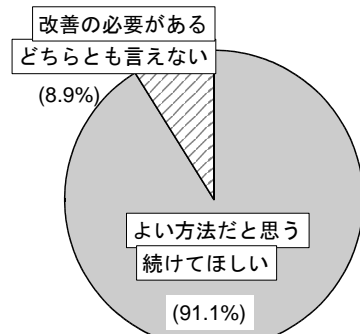


3. 今、あなたが選択しているコースの学習は、あなたの学習方法に合っていますか。



○保護者の意識調査結果

1. コース別の習熟度別学習についてどう思いますか。



問題がある, やめたほうがよい (0%)

(4) 研究成果の普及の方策

1. 研究会の実施について

- 研究会名 徳島県基礎学力定着化プロジェクト事業/学力向上フロンティア事業
・ 学力向上フロンティアスクール指定校研究発表会
- 日時 平成15年11月20日(木)
- 場所 徳島市論田小学校(本校)
- 研究会の概要
・ 授業公開 ①1年チームティーチング②2年チームティーチング ③4年少人数習熟度別学習④6年少人数習熟度別学習⑤障害児学級個別学習
- ・ 授業研究会、全体会の詳細略

2. 普及活動について

- ロンデンフロンティアHP作成 URL <http://tgn3.tcn.ne.jp/ronden>
- ・ フロンティア活動の様子や「フロンティア通信」により、地域や保護者への啓発活動を行っている。
- 研究紀要作成
・ 15年度の研究内容及び研究実践等や発表会の資料を67Pの冊子にしてまとめた。
- 今後の予定
・ HP等を通じて、本校の取り組みを評価していただき、県内外の学校等と交流を図りたい。

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- | | | |
|----------------------|-------------------------------------|---|
| 【新規校・継続校】 | <input type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | <input type="checkbox"/> 14年度からの継続校 |
| 【学校規模】 | <input type="checkbox"/> 6学級以下 | <input type="checkbox"/> 7~12学級 |
| | <input type="checkbox"/> 13~18学級 | <input type="checkbox"/> 19~24学級 |
| | <input type="checkbox"/> 25学級以上 | |
| 【指導体制】 | <input type="checkbox"/> 少人数指導 | <input type="checkbox"/> T.Tによる指導 |
| | <input type="checkbox"/> 一部教科担任制 | <input type="checkbox"/> その他 |
| 【研究教科】 | <input type="checkbox"/> 国語 | <input type="checkbox"/> 社会 |
| | <input type="checkbox"/> 生活 | <input type="checkbox"/> 音楽 |
| | <input type="checkbox"/> 体育 | <input type="checkbox"/> その他 |
| | | <input type="checkbox"/> 算数 <input type="checkbox"/> 理科 |
| | | <input type="checkbox"/> 図画工作 <input type="checkbox"/> 家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input type="checkbox"/> 有 | <input type="checkbox"/> 無 |

【特色ある取組事例として紹介したいポイント】

算数科において低学年ではチーム・ティーチング、中学年では単純分割の少人数指導から習熟度別学習への発展、高学年ではチーム・ティーチングから少人数の習熟度別学習への発展と発達段階に応じた指導方法の改善に努めている。